

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20560603

研究課題名（和文） 御手伝普請を通じた建築情報の地方伝播に関する研究－徳川家霊廟の地方寺社への影響－

研究課題名（英文） Study on the spread of the architectural information through the constructions for the Shogunate by Daimyo to the Japanese local cities - Influence of the Tokugawas mausoleum on the local architectures of the temples and the shrines-

研究代表者 伊東 龍一 (ITO RYUICHI)

熊本大学・大学院自然科学研究科・教授

研究者番号：80193530

研究成果の概要（和文）：

江戸幕府の造営した徳川家霊廟は、諸大名が営んだ霊廟建築の規模や構造・意匠に大きな影響を与えた。17世紀までは、諸大名の霊廟は、比較的多様性に富み、その中には規模の大きなものや極めて装飾性に富んだものもあったが、概ね18世紀以降になると、梁間1間四方～3間四方の平面で宝形造、彫物等の装飾は向拝などに限定されるような統一的形式となるものが多い。徳川家霊廟の規模・形式を越えないという条件の上で、大名家に相応しい格式で造営されたと思われる。

幕府の様式の伝播に、御手伝普請の影響を実証的に証明することのできる例はそれほど多くはなかったが、工事を通じて生じた人的な関係が職人を地方に招聘することになった例、工事の際に作成された絵図や記録が地方にもたらされた例の存在は明らかである。実際には、堅苦しい造営関係記録ではなく、紀行文の類が与えた影響も大きかったと思われる。

研究成果の概要（英文）：

The Tokugawas mausoleum had a big influence on the scale and the design of the mausoleum building which daimyos . Until the 17th century, the mausoleum of daimyos was relatively full of variety. There were the big mausoleums in the scale or the mausoleums extremely full of decorations. However, after the 18th century, the mausoleums are with a unified form to use the pyramid-shaped roof. According to a scale and the form of the Tokugawas mausoleum, the mausoleum of the Daimyos was built. There were not necessarily many examples which were able to prove the influence of the style of the Shogunate through “OTETSUDAI BUSHIN” substantially, but was able to show some specific examples

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：日本建築史

科研費の分科・細目：建築学、建築史・意匠

キーワード：江戸幕府 徳川家霊廟 寺院 神社 装飾 屋根形式

1. 研究開始当初の背景

装飾の豊かな寺社建築の多い関東の中

心・江戸にあって、おそらく当時最高の技術をもって造営されたはずの徳川家霊廟につ

いては、ながらく戦前の田邊泰による研究（『徳川家霊廟』彰国社 昭和18年）等があるのみであったが、筆者は、江戸時代にすでに失われた歴代将軍や夫人・将軍生母の霊廟を含めて、多くの徳川家霊廟の構造や装飾の形式等を絵図や古記録を用いて復元的に明らかにしてきた。したがって、ようやく徳川家霊廟の建築を、他の霊廟建築を含む寺社建築と比較検討できる段階に至ったといえる。

また、御手伝普請については、善積美恵子「御手伝普請について」、「手伝普請一覧表」（『学習院大学文学部紀要』14号、15号 昭和43年、44年）において、基本事項が明らかにされたが、造営形態の詳細や造営がもたらした建築の情報については不明な点が多い。

一方、建築情報の移動が、近世の寺社建築に与えた影響についての研究は、全国の近世社寺建築調査が一通り終了した昭和60年代の初め以降、ほとんど行われなくなった。これは一種のブームが去ったということだけであって、御手伝普請を通じた建築情報の伝播と影響に関する研究は今後不可欠である。

2. 研究の目的

江戸時代を通じて幕末まで行われた日光東照宮をはじめとする徳川家霊廟の造営・修営は、幕府自らが実施したものもあるが、多くは大名からの労働力や資金の提供を受けて行われた御手伝普請であった。徳川家の霊廟建築は、今では失われてしまったものが多いが、筆者が明らかにしてきたように江戸時代における最高の技術をもって造営されたことに間違いはない。御手伝普請は、大名の国許と江戸の間での多くの人間の移動をもたらしたが、それとともに様々な建築技術・技法、意匠に関する建築情報の移動も伴ったであろうことは想像に難くない。徳川家霊廟の様式が地方に伝播する可能性は強く、ときには地方から中央に持ち込まれるといった逆の現象もまったくありえなかったとはいえないであろう。

本研究では、①徳川家霊廟（将軍霊廟だけではなく、夫人や将軍生母の霊廟までを含む）造営における御手伝普請の内容を御手伝に関わった大名に残された古記録から検討するとともに、②造営への関与を通じて得て、国許に持ち込んだ建築に関わる情報を探り、かつ③徳川家霊廟と大名国許の寺社建築の技術・技法・装飾の形式との比較を通じて、造営がどのような影響を与えたのか、あるいは与えなかったのかを明らかにし、建築における中央・地方間での様式の伝播、様式の成立の可能性を検討することを目的としている。

3. 研究の方法

第一に、主要な大名の御手伝普請関係史料および関係建築史料の調査と分析を行った。大名は弘前藩・津軽家、信濃松代藩・真田家、福井藩・松平家、岡山藩・池田家などで、これらの御手伝関係史料を分析する。

次に御手伝関係史料を調査した藩を中心に、その藩で造営した寺社や霊廟建築の調査を実施し、構造形式や装飾や細部意匠の形式、関係職人などについて分析した。

なお、徳川家霊廟そのものの形式についても、これまでの不十分な部分を補う史料調査などを適宜行った。

上記の調査結果を合わせて検討することによって、徳川家霊廟と地方寺社の形式の共通性や地方の独自性を明らかにし、影響関係や御手伝普請の直接の影響の有無を明らかにした。

4. 研究成果

御手伝普請で伝えられた情報により、どのような建築が生まれうるかを正確に検討するため、藩主が幕府に願い出て江戸初期造営の将軍霊廟を中心に検討した。玉井宮東照宮本殿（岡山県、正保2年 1645）は幕府の御大工・木原義久が「差図」作成に関わったものの、基本的には藩の大工が担当したと思われる。幕府の影響は平面や規模に限定されたとみられる。掛川藩造営の龍華院大猷院霊屋（静岡県、文政5年 1822 再建）は3間四方、宝形造、一間向拝付で、明暦2年（1656）に建立された建物を継承した可能性の強く、津山藩が造営した本山寺御霊屋（承応元年 1652）は、宝形造の本殿に、相の間と一間唐破風向拝付の拝殿とを接続する形式で、いずれも紅葉山の徳川家霊廟を簡略化した形式である。この後に藩が造営する霊廟や寺社建築は、江戸初期に自藩が建てた徳川家霊廟を越える壮麗さをもつことができなかつたであろう。

ただし、新出の建地割によって新潟県旧高田藩の松平忠直の菩提寺の長恩寺（現在、新潟県上越市天崇寺）にあった東照宮・大猷院霊屋をみると、東照宮は入母屋造、正面千鳥



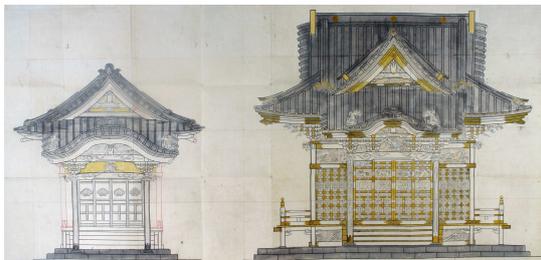
本山寺御霊屋（岡山県 承応元年 1652）

破風付、向拝1間の建物で、大猷院霊廟は東照宮に比べるとやや小型ながら、入母屋造、妻入、向拝1間付の建物で、桁行6間の細長い平面をとり、装飾は、両者とも彫物が多く、地紋彫も使用していた。

次に各大名家の霊廟の形式をみる。
真田家の御霊屋である初代信之御霊屋・万治3年(1660)、2代信政御霊屋(林正寺本堂)・万治3年(1660)、3代幸道御霊屋(長国寺開山堂)・享保12(1727)、4代信弘御霊屋・元文2年(1737)の歴代藩主、および初代信之3男・真田信重御霊屋(慶安元年1648)、初代信之夫人・大蓮院(小松姫)御霊屋(大英寺本堂)・元和6年(1620)寛永元年(1624)移築を通観すると、歴代藩主の御霊屋は、享保期の3代幸運までは入母屋造で、宝形造は藩主以外に限られるのに対し、藩主でもそれ以降はいずれも宝形造となっている。また、18世紀以降の御霊屋は装飾の簡略化がみられる。このうち、3代幸道の御霊屋については、建立後、わざわざ入母屋造を宝形造に改造していることが注目される。徳川家霊廟においては、本廟である増上寺や寛永寺の霊廟では、将軍は入母屋造、夫人や将軍生母はおおむね宝形造、紅葉山の霊廟では、将軍廟であっても宝形造であったことから、屋根形式の点で、入母屋造は宝形造よりも格式の点で上位にあるとの位置付けがあるようにみえる。これらの点から、18世紀においては大名の御霊屋において入母屋造採用に対する規制あるいは自粛があった可能性がある。享保5年には、徳川家霊廟の御仏殿等以下を造営しなくなるから、大名家においては、御霊屋を造営するにしても装飾性を抑制することがあった可能性がある。

このように考えると、米沢藩の上杉家の霊屋は、2代～8代宗房(延享3没1746)までが入母屋造、9代重定(寛政10没1798)～12代が宝形造であって、この藩の霊廟についても藩の経済的事情による簡略化という理由以外に、幕府への配慮があった可能性が考えられてくる。

また、方1間・2間・3間の宝形造の形式の霊廟は、諸大名の霊廟に類例を数多く見出すことができる。仙台藩や熊本藩や真壁藩な



高田藩東照宮(右)・大猷院廟(左)
建地割(伊東所蔵)江戸後期の様相をみせる。

どで、幕府への配慮が背景にあった可能性が強い。

ただし、弘前藩主・の霊廟は、革秀寺津軽為信廟および長勝寺の津軽家霊廟5棟、すなわち、環月臺(初代藩主為信室霊屋 寛文12年1672)・碧巖臺(二代藩主信枚霊屋 寛永8年1631)頃造)・明鏡臺(二代藩主信枚室霊屋 寛永15年1638)頃造)・白雲臺(三代藩主信義霊屋 明暦2年1656)・凌雲臺(六代藩主信著霊屋 宝暦3年1753)が残されるが、梁間1間桁行2間の入母屋造妻入であって、宝形造ではない。弘前藩においては、18世紀の霊屋として凌雲臺があつて、それも入母屋造であったから、幕府への配慮が宝形造を生んだと考えれば、この藩においては、宝暦までそれが無かったことになる。今後は、その時期の問題も含めて明らかにする必要がある。

一方、御手伝普請が幕府の建築をどのような形式で地方に伝えたのかを検討すると、御手伝普請が、藩と幕府の工匠を結びつける契機となり、幕府の工匠が地方へ直接出向いて造営に関与する場合があつた。津軽藩造営の岩木山神社本殿(青森県、元禄7年1694)はその1例である。正面に龍の彫物をもつ装飾性の高い建物の造営には幕府の彫物棟梁・岸上太郎兵衛が関与した。岸上が津軽藩に招かれる契機は天和度日光東照宮修理における津軽藩の御手伝普請であつた可能性が強い。

また、御手伝普請は、図面や建築を描く絵画、造営関係文書を地方にもたらした。延享度日光東照宮修理では、福井藩に東照宮本殿内外部を描く展開図的な絵画「日光山御宮之図」(宝暦2年1752)を伝えた。藩主自らが絵師・原文哲に描かせたものである。また、安永度の日光東照宮修理では、広島藩に諸建物の建地割「日光御宮仁王御門ヨリ御奥院迄諸堂社其外御鳥居想輪塔共凡建地割」(広島市立図書館浅野文庫 安永9年1780)を伝えている。こちらは作事方が描いたもので、絵師の描く絵とは異なり地味であるが、凡例を



真田信弘御霊屋(長野県 元文2年1737)
屋根は宝形造

もって鍍金や金箔置、銅瓦葺、極彩色の部分、朱塗の部分、石造の部分などを示し、木部の彩色の概略を伝えていて、それを裏付けるように奥書には「但彫物絵様等／猶大略之絵図」とあり、装飾の概要を示そうとしていることは明らかである。いずれも図や絵の建築的精度は低いが、目を奪うような装飾性を伝えている。これが藩の寺社建築に影響した可能性はある。ただし、地方における装飾性の高まりは、これらの御手伝普請の実施された時期以前からみられるから、装飾性の高まりそのものを促したわけではないことになる。

他に熊本藩・津軽藩・延岡藩等の御手伝普請における日光東照宮をはじめとする徳川家霊廟修理に関連する関係史料等も含めてみる限り、18世紀以降の修理に関するものが大半で、しかもビジュアルな史料はほとんどない。当初は豊かな装飾の技法や形式が地方にもたらされ寺社の建築に影響を与えた可能性を想定していたが、時期的にも、史料の性格からも明確に大きな影響があったとは言えない。

大分の柞原八幡宮の南大門は、元和9年(1623)造営で、古河古松軒「西遊雑記」によれば、天明3年(1783)において「日ぐらしの門」という日光東照宮の陽明門を思わせる呼称が与えられている。「由原八幡宮奉南中大門造営事」によれば、この時期には中央でも珍しい、花鳥や人物を彫り彩色を施した、大きなパネル状の彫物を多用した建築であったことがわかる。この門は慶応2年(1867)に再建され、現在に至るが、再建された門も「日暮門」(『柞原八幡宮志』大正13年1924)とされている。現存するこの門の扉には、軍配形の内部に花々を象った彫物がある。これは日光東照宮の陽明門にはないが、同宮の唐門によく似た意匠である。これによって慶応の再建時には日光東照宮の意匠が意識されていたであろうことは間違いなく、それ以前の元和の南大門においては、造営時とはやや考えにくいものの、遅くとも天明3年には、

それを見た人物がこの門の装飾を日光東照宮の華やかな意匠と重ね合わせて見ている。

柞原八幡宮のある大分府内藩が御手伝普請をこれらの門の造営と関連するような時期に行った事実はないから、華やかな日光のイメージは、御手伝普請とは別のルートで伝わったと考えざるを得ない。先に奇しくも古河古松軒「西遊雑記」を引用したが、こういった紀行文の役割はおそらくは大きく、今後その役割を検討してゆく必要もあろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

- ① 幾島健・伊東龍一「柞原八幡宮再建南大門の構造形式と装飾」日本建築学会(大会学術講演)2009.08.28、東北学院大学泉キャンパス(宮城県)

[図書] (計2件)

- ①若林純・萩内佐斗司・伊東龍一・林雅彦・田中三蔵『寺社の装飾彫刻 宮彫りー壮麗なる超絶技巧を訪ねて』日貿出版社 2012 (『彫物の江戸時代』pp.147-152を執筆)
- ②土田充義・村松幸彦・佐藤正彦・豊田寛三・西別府元日・伊東龍一『柞原八幡宮建造物調査報告書』柞原八幡宮 2010 (pp.70-74, pp.89-109, pp.121-122, pp.151-155を執筆)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊東 龍一 (ITO RYUICHI)

熊本大学・大学院自然科学研究科・教授

研究者番号：80193530



「柞原八幡宮絵図」(柞原八幡宮蔵 宝永4年か)に描かれた元和造営の南大門